愛媛新聞 6月25日

311の経験から、電気、水がなくても”空冷”だから「安全」とばかりに、原子力規制委員会は伊方に乾式貯蔵施設の設置を進めている。だがしかし事情を調べると「伊方3号機を稼働し続けるために」満杯に近づいた使用済核燃料プールの”空き”をつくらねばという切迫した問題がある。それにしても使用済みMOX燃料は温度が高すぎて、乾式貯蔵に移すには数百年かかるそうだ。

永久貯蔵に地元警戒

伊方乾式 基準適合

核ごみ 行き場なく

四電「あくまで一時的」

四国電力伊方原発（伊方町）の敷地内で使用済み核燃料を最長60年保管する乾式貯蔵施設の設置計画が24日、原子力規制委員会で了承された。貯蔵施設の新設は、プールでの保管容量が上限に近づく中で一時的な保管場所を確保するのが目的だが、使用済み燃料を再利用する「核燃料サイクル」が機能しない現状に、地元からは永久に貯蔵されかねないと警戒する声も聞かれる。（1面参照）

使用済み核燃料の搬出先となる日本原燃の再処理工場（青森県六ケ所村）は本格稼働時期が見通せない。原燃は2021年度上期を完成予定とするが、再処理の過程で発生する高レベル放射性廃棄物の処分地が決まっていないなど、本格稼働に向けたハードルは高い。

「乾式貯蔵施設は根本的な解決策でなく、再処理工場の見通しが立たずプールがいっぱいになるから取った選択」。伊方町中之浜の農業男性（60）はこう懸念する。地元で反原発を長年訴えてきた近藤寧子さん（65）＝八幡浜市＝は「伊方3号機の『延命措置』を目的とした乾式貯蔵施設には反対」とし、使用済みプルトニウム・ウラン混合酸化物（MOX）燃料は乾式貯蔵の対象外であると指摘。「地元は長期間にわたって核の『ごみを抱えていくことになる」と話す。

再処理工場の稼働遅れで、全国の原発で貯蔵プールの容量は逼迫（ひっぱく）している。先行使用されている再処理工場のプールはすでに満杯状態で、四電はこれまでに434体を搬出したが、14年を最後にストップしている。

伊方原発でも行き場のない使用済み燃料がたまり続け、3号機のプールは管理容量（約1600体）の約85％に当たる1362体が保管されている。3基の中で唯一稼働する3号機は年間35～40体程度の使用済み燃料が発生することから、6年後の26年度ごろ満杯になる見通し。

廃炉作業中の1号機の使用済み燃料は3号機に移し終えたが、廃炉が決まっている2号機には316体が残ったまま。解体作業前には搬出しなければならない。

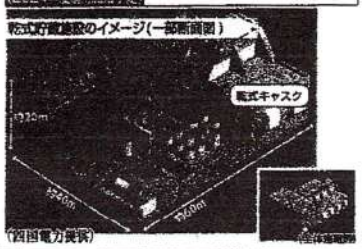
乾式貯蔵施設は約120体の保管が可能で、四電は24年度運用開始を目指す。「あくまで一時的な保管施設」と強調し、2、3号機のプールにある15年以上冷やした燃料約850体を順次、キャスクと呼ばれる金属製の容器に収納し保管する計画だ。

地元には「プール貯蔵より安全性が向上するなら、少しでも早くできる方が安心できる」（伊方町袴浦の60代男性）と評価する声もある。安全協定に基づく施設設置の事前協議の申し入れを受けている高門清彦町長は「これまで通り安全性を最優先とした判断を行いたい」とコメント。四電は「地元自治体への説明や今後の審査対応も含め、設置に向けた取り組みを着実に進める」とする。

（門屋駿介、伊藤愛、岡敦司）

伊方原発の使用済み核燃料保管状況

		管理容量	貯蔵体数	貯蔵余裕
プール	1号機（廃炉作業中）	－	0体	－
	2号機（廃炉決定）	－	316体	－
	3号機	約1600体	1362体	約240体
乾式貯蔵施設（2024年度運用開始予定）		貯蔵容量約1200体		



「新たな危険招く」

脱原発団体

四国電力が伊方原発（伊方町）の使用済み核燃料を保管するため敷地内に設置予定の乾式貯蔵施設に対し、原子力規制委員会が事実上の合格を与えた24日。四電は青森県六ケ所村の再処理工場に搬出するまでの一時的な貯蔵施設と位置付けるが、県内の脱原発団体や識者からは再処理工場がいまだ稼働していない状況を踏まえ、なし崩しに半永久的な貯蔵施設となることへの懸念が相次いだ。

「いったん造られると、存在するという事実に押され暫定保管施設になってしまうのでは」。「原発さよなら四国ネットワーク」の小倉正さん（59）＝松山市＝は心配する。広島高裁が2017年、阿蘇カルデラの大規模噴火の影響を理由に立地を不適とし、3号機の運転を差し止めたことを念頭に「何百年も使用済み核燃料が置かれ続けるのなら、乾式貯蔵施設も立地は不適ということだ」と批判した。

「伊方原発をとめる会」事務局次長の松浦秀人さん（74）＝松山市＝も、現在の原発敷地が使用済み核燃料の半永久的な保管場所とされてしまう恐れを懸念する。四電が「安全保管」できる施設の整備を名目に、3号機が老朽化するまで運転しようとしているとみて「新たな危険を招く」と問題視した。

松山大経済学部の張貞旭教授（原子力政策論）は、現在のプールでの貯蔵より「安全性は高い」との見方を示しつつ、半永久的な貯蔵施設と化す事態を見通し「そもそも原発の導入時に、使用済み核燃料をどう処分するか決めておかなかったことに根本的な問題がある」と強調した。

（西尾寛昭）